日本美術を世界へ
林 忠正

日本美術を西洋に紹介　印象派を日本に紹介　日本の美術界にさまざまな提案

1853（嘉永6）年11月7日―1906（明治39）年4月10日

医者の家系に生まれ育つ

射水郡高岡町(現高岡市)に代々続く町医者・長崎家の二男に生まれました。祖父はオランダ流の医者、父も医者で、蘭学や国学にも通じていた知識人の家庭で育ちました。幼いころから祖父や父の影響を受けて、西洋へのあこがれをもっていました。17歳のとき、富山藩大参事(現在の県知事)を務めていた林太仲の養子となり、林家を継ぎました。

大学に通っていたころの忠正（前列右）（個人蔵）

日本の文化や美術を広めたい

忠正は藩の推薦で上京し、大学南校(現東京大学)に入学しました。大学でフランス語を学んだ忠正は、従兄の磯部四郎がパリ大学に留学していたこともあり、自分もパリに留学したいと願っていました。1878(明治11)年、忠正が25歳のとき、パリ万国博覧会に参加する貿易会社の通訳の仕事を得て、大学を中退し、フランスに渡りました。

当時、ヨーロッパでは日本美術への関心が高まり、パリ万博でも日本の工芸品が人気でした。忠正は展示場で、日本の文化や美術に関心をもつ知識人や、まだ世に認められていなかったモネ、マネ、ドガなどの革新的な画家（現在の印象派*）たちにフランス語で解説し、たちまち彼らと親しくなりました。このときからの友情は、忠正がパリを去る日まで続いたのです。

日本美術と印象派を紹介

万博が終わった後、忠正は1884(明治17)年にパリで美術店を開きました。商売だけではなく、日本美術について解説したり、日本美術の研究者を助けたりして、日本美術の専門家になっていきました。

1890(明治23)年ごろから、忠正は浮世絵の販売に転じました。忠正によってパリに送られた浮世絵は、優れた作品が多く、今もその価値が世界に認められています。それらの浮世絵は、ゴーギャンやゴッホなどにも大きな影響を与えています。忠正は優れた浮世絵は手元に残して、決して売りませんでした。そして浮世絵は低俗だと思っていた当時の日本人に、その芸術性を認めるよう説得したのです。

忠正は印象派の作品を初めて日本に紹介しましたが、そのころはほとんど理解されませんでした。

忠正が日本文化の概要を紹介した日本特集号『パリ・イリュストレ』1886年5月号（個人蔵）

＊印象派【いんしょうは】1860年代からのヨーロッパ絵画の改革を実現し、近代絵画を生んだ画家の集団です。その後の芸術全般に大きな影響を与えました。印象派の絵画は、現代でも最も人気の高い芸術作品です。

日本美術への思いを伝える

忠正は「1900年パリ万国博覧会」の事務官長に任命されました。事務官長はパリ万博の日本の総責任者で、民間人が任命されるのは例のないことでした。

この博覧会で忠正は念願だった日本美術の全体像を紹介することができました。8世紀からの国宝級の美術品800点が展示され、人々を感動させました。

忠正はあらゆる機会に、日本の美術界に意見を述べています。1886(明治19)年には求めに応じて「高岡銅器維持の意見」を、故郷高岡の銅器職人たちに送りました。

この中で忠正は、日本の金属工芸品の高い技術を認めたうえで、伝統にこだわることなく、世界の人々に理解される美しさを目指すべきだと説いています。忠正の視野は、常に世界全体に向けられていたのです。

1905(明治38)年に帰国した忠正は、印象派絵画のコレクションを持ち帰り、自分の手で西洋近代美術館を造ろうと計画していましたが、果たせないまま亡くなりました。ポール・ルヌアールの素描作品だけは帝室博物館（現東京国立博物館）に寄贈されましたが、残りの西洋画の価値は理解されることなく、1913(大正2)年にアメリカで散逸してしまいました。

忠正が注文した2代北岳横山弥左衛門孝純作「菊花文飾壺」（個人蔵、東京国立近代美術館工芸館寄託、国登録美術品）

『林忠正浮世絵コレクション売立目録』（個人蔵）

忠正自筆の「高岡銅器維持の意見」の表紙と序文（個人蔵）

夢や志をかなえたポイント！

- 必要な外国語を話せるようになる
- 知らない場所に勇気をもって飛び出す
- よいと思うことはよいと主張する

1853（嘉永6） …… 0歳
高岡の医家・長崎家の二男として生まれる

1870（明治3） …… 17歳
富山藩大参事林太仲の養子となり林忠正と改名

1871（明治4） …… 18歳
大学南校に入学

1878（明治11） …… 25歳
パリ万博の通訳としてフランスへ渡る

1881（明治14） …… 28歳
ルイ・ゴンスの『日本美術』の執筆を助ける

1884（明治17） …… 31歳
パリで美術店を開く

1886（明治19） …… 33歳
「高岡銅器維持の意見」を高岡の銅器職人へ送る

1890（明治23） …… 37歳
近代絵画の収集を開始

1898（明治31） …… 45歳
パリ万博の事務官長となる

1905（明治38） …… 52歳
帰国する

1906（明治39） …… 52歳
亡くなる

コラム　黒田清輝を見出した忠正

法律を勉強するためパリに来ていた黒田清輝の絵の才能を見抜き、法律よりも絵画の道へと進むよう勧めたのが忠正です。

後に黒田は「日本洋画の父」とも呼ばれるほどに活躍しました。忠正の人物を見る目の確かさを物語っています。

黒田清輝の代表作「湖畔」（東京国立博物館蔵、国指定重要文化財、城野誠治撮影）

豆知識　忠正が通訳を務めた1878年のパリ万博では、エジソンの蓄音機のほか、自動車や冷蔵庫などが出展されました。

科学技術と産業を結びつけたい
高峰 譲吉

アドレナリンを発見　高岡にアルミ産業を提案　米国に桜を寄贈

1854（嘉永7）年9月13日—1922（大正11）年7月22日

外国語や化学に興味

射水郡高岡町（現高岡市）で代々続く町医者の長男として生まれました。

父が加賀藩（富山県・石川県）の洋式軍隊養成学校「壮猶館」の技術者として勤務することになったため、１歳で金沢へ移り住みました。８歳で加賀藩の藩校「明倫堂」に入学し、その後長崎や大坂などで英語や医学などを学びました。

少年時代の譲吉（右から２人目）（高峰譲吉博士顕彰会蔵、高岡市立博物館寄託）

研究の成果を実用化

譲吉は京都や大坂の医学校で化学の実験や分析を勉強するうち、化学の道に進むことを決意しました。1879（明治12）年に工部大学校（現東京大学工学部）応用化学科を１番の成績で卒業しました。

1880（明治13）年から３年間のイギリス留学の後、国の役人になり、アメリカで化学肥料の製造法を研究しました。帰国後、日本初の化学肥料会社である東京人造肥料会社（現日産化学工業）を設立しました。

また、このころ、譲吉は麦芽（モルツ）を使わずにウイスキーを造る方法を考え出しました。麹を使って造るこの方法は「高峰式元麹改良法」と呼ばれています。この方法でウイスキーを造ろうというアメリカの酒造会社が現れたため、再びアメリカへ渡って会社をつくり、技術者から尊敬されました。

ピオリア高峰工場（高峰譲吉博士顕彰会蔵、高岡市立博物館寄託）

アドレナリンの抽出に成功

譲吉はその後も地道な研究を続け、タカヂアスターゼという、食べ物を消化する酵素の発見と、副腎髄質ホルモン*のアドレナリンを取り出すことに成功しました。

麹かびの研究の延長線上で発見されたタカヂアスターゼはアメリカの医薬品会社が商品として売り出しました。譲吉はアメリカの医薬品会社が日本で販売することを認めず、1899（明治32）年に設立された会社に日本国内で独占して販売する権利を取らせ、譲吉が初代社長に就いています。

アドレナリンの抽出は、タカヂアスターゼの発見以上に高く評価されました。アドレナリンは出血を止める効果的な薬として使われ、外科手術で命が救われる確率が一気に高まったのです。

タカヂアスターゼとアドレナリンは薬として商品化されました。（高峰譲吉博士顕彰会蔵、高岡市立博物館寄託）

＊副腎髄質ホルモン【ふくじんずいしつほるもん】　副腎は哺乳類などにある器官で、腎臓の隣にあり、いろいろなホルモンを出します。「副腎髄質ホルモン」は炎症を抑えるなど広い範囲で身体機能の調節を助けます。

水力発電でアルミ産業を推進

譲吉は1918（大正７）年５月の地元の新聞に、「富山県における軽銀（アルミニウム）興業について」と題した論文を発表しました。

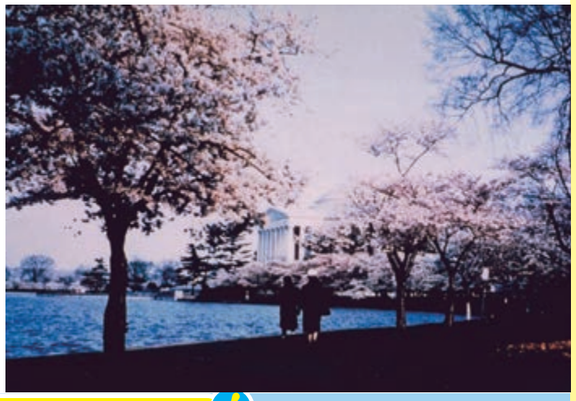
その中で、アルミが鉄の３分の１の軽さであること、腐りにくく熱を伝える効率が高いことや、他の金属と混ぜて合金をつくることができることなどの特性を説明したうえで、水力発電を行い、伏木・高岡へ電気を送れば、アルミ工業を中心とした大工業地帯として発展するだろうと述べています。

譲吉は、1919（大正８）年、黒部川で本格的な電源開発を始めるために東洋アルミナム株式会社を設立しています。

高岡ではその後、竹平政太郎が1960（昭和35）年、51歳で設立したアルミ建材メーカーの三協アルミニウム工業（現三協立山アルミ）など、多くのアルミ会社が成長を遂げました。伏木富山港の臨港工業地帯には、富山の豊かな水と水力発電を利用したアルミ製錬（原料であるボーキサイトからアルミニウムを取り出すこと。大量の電気を使用します）と、アルミに関連した産業が発達することとなったのです。

譲吉が使った顕微鏡（金沢ふるさと偉人館蔵、高岡市立博物館提供）

竹平政太郎



ワシントンD.C.のポトマック河畔の桜（高峰譲吉博士顕彰会蔵、高岡市立博物館寄託）

夢や志をかなえたポイント！

- 興味のあることを学ぶ
- 学んだことを人の役に立てる
- 国際的な視野をもつ

1854（嘉永７） …… 0歳
射水郡高岡町に生まれる

1864（元治元） …… 10歳
長崎へ留学する

1868（明治元） …… 14歳
京都の兵学塾、大坂の緒方塾に入学

1879（明治12） …… 25歳
工部大学校を首席で卒業

1880（明治13） …… 26歳
イギリスに留学する

1883（明治16） …… 29歳
農商務省に入省

1887（明治20） …… 33歳
東京人造肥料会社の技師長になる
アメリカ人女性と結婚

1894（明治27） …… 40歳
食べ物を分解する酵素「タカヂアスターゼ」を発見

1900（明治33） …… 46歳
アドレナリンの抽出に成功

1905（明治38） …… 51歳
ニューヨークに日本人倶楽部を設立

1912（明治45） …… 58歳
帝国学士院賞を受賞

1922（大正11） …… 67歳
ニューヨークで亡くなる

コラム　日米の懸け橋となった高峰譲吉

譲吉はアメリカ人女性キャロラインと結婚し、アメリカに永住しました。国際人であった譲吉は、日米の親善にも力を尽くしました。

ワシントンD.C.のポトマック川沿いやニューヨーク市のクレアモント公園に桜の木を寄贈したことで知られています。

譲吉と妻キャロラインと子どもたち（高峰譲吉博士顕彰会蔵、高岡市立博物館寄託）

豆知識　研究成果を事業に結び付け、必ず特許を取った譲吉の個人遺産は当時のお金3000ドル。現在の円にすると約６兆円に相当します。

越中の人たちの暮らしを守りたい
米沢 紋三郎

富山県の分県独立を推進　分県の建白書を提出　衆議院議員として郷土に貢献

1857（安政4）年3月5日―1929（昭和4）年11月10日

塾で先生の代理を務める

新川郡入膳村（現入善町）で裕福な農家の二男として生まれました。富山藩主に学問を教えた岡田呉陽（→26ページ）の塾に14歳で入門し、17歳で塾頭（先生の代理）を務めるほど優秀でした。紋三郎が幼いころから心を痛めていたのは、黒部川などの急流がはんらんを繰り返し、人々に大きな被害を与えていることでした。

紋三郎が生まれた家（入善町教育委員会提供）

越中の独立を決意

越中国（富山県）では、黒部川のほか神通川や常願寺川などが、たびたびはんらんを起こしていました。紋三郎は、洪水を防ぐ工事を進めるために政治家になろうと決意しました。

越中国は1876（明治9）年から、加賀国（石川県南部）、能登国（石川県北部）とともに石川県となっていました。紋三郎は24歳のとき、石川県議会議員になりました。1881（明治14）年、紋三郎は県議会で、越中の川の改修工事を急いで行う必要があると説きました。しかし、加賀と能登の議員は道路を造る方が先だと主張します。

実はこのときの越中の議員数は22人で、加賀と能登の47人の半分以下でした。議員の数が少ないため、越中側の意見は取り入れられません。越中と加賀・能登は一つの県としてまとまっていくには無理があると紋三郎は考えました。越中は石川県から独立すべきだとの決心を固めたのです。

上京して悲願を訴える

紋三郎は同じ考えの議員らを集めて独立運動を起こそうと考えました。当時は政府に反対すると罰せられることが多く、意見を言うにはかなりの覚悟が必要でした。

紋三郎は1882（明治15）年、県内の仲間たちと「越中改進党」という政党をつくりました。大隈重信の「立憲改進党」に合流し、東京で活躍する多くの自由民権運動*家らと交流しました。

そして、1882（明治15）年夏、「越中分県の建白書」という越中の独立を求める意見書を書き上げました。紋三郎は9月、建白書を政府に提出するため、入善を出発し東京へ向かいました。紋三郎が25歳のときでした。

分県のため上京した越中改進党のメンバー（中央が紋三郎）（入善町教育委員会提供）

＊自由民権運動【じゆうみんけんうんどう】 明治政府では、明治維新で活躍した藩出身の政治家が権力を独占していました。こうした政治に反対し、国会の開設や憲法の制定などを要求した運動が自由民権運動です。

富山県が誕生

ところが、なかなか政府の役人が会ってくれません。旅館に泊まり込んで朝早くから役所へ行き、面会を待つ日が続きました。粘り強く機会を待っていたある日、やっと担当の大臣への面会が許され、ついに建白書を手渡すことができました。

それからおよそ半年後の1883（明治16）年5月9日、政府は「富山県を置く。その範囲は越中国全体とし、県庁の位置を富山とする」と発表しました。紋三郎たちの念願がかなったのです。

7月1日、正式に初代の県知事として国重正文が赴任し富山県が誕生しました。紋三郎たち関係者はもちろん、越中国の人々は大喜びしました。「分県まんじゅう」を売り出す和菓子店が現れたほどでした。

紋三郎は同年8月1日に富山県議会議員となり、議長を2回務めました。その後は衆議院議員に当選し、入善銀行をつくったり、黒部川の堤防工事を進めたりして郷土の発展に尽くしました。

富山県設置を決めた太政官通達書（富山県公文書館蔵）

「越中分県の建白書」の写し（入善町教育委員会提供）

富山城址に開庁した富山県庁（富山市郷土博物館所蔵）

夢や志をかなえたポイント！

- 周りの人が幸せになる方法を考える
- 正しいと信じたことは、あきらめない
- 困ったときに助けてくれる仲間をもつ

1857（安政4） …… 0歳
新川郡入膳村の豪農の家に生まれる

1874（明治7） …… 17歳
岡田呉陽の塾の塾頭になる

1881（明治14） …… 24歳
石川県議会議員になる

1882（明治15） …… 25歳
越中改進党を結成
「越中分県の建白書」を執筆する

1883（明治16） …… 26歳
富山県議会議員になる

1886（明治19） …… 29歳
富山県議会議員を辞める

1896（明治29） …… 39歳
入善銀行を設立し、頭取になる

1903（明治36） …… 46歳
衆議院議員となり立憲政友会に入党

1910（明治43） …… 53歳
政界を引退

1911（明治44） …… 54歳
入善銀行頭取を辞める

1929（昭和4） …… 72歳
『霊魂不滅論』の執筆中に亡くなる

コラム
北陸の自由民権運動の草分け、稲垣示

紋三郎と同じ時代に、北陸で先駆けて自由民権運動を起こしたのは、射水郡棚田村（現射水市）出身の稲垣示です。稲垣は板垣退助の考えに共感し、1880（明治13）年、富山県で初めての政治団体を高岡につくり、2年後には退助による日本最初の政党「自由党」と考えを同じくする「北立自由党」を高岡で発足させました。示は後に国会議員となり、普通選挙の実現のために運動を続けました。

稲垣示の碑（射水市棚田）

砺波平野に鉄道を
大矢 四郎兵衛

中越銀行設立に参加　中越鉄道の建設に力を尽くす　北海道で開拓事業

1857（安政４）年12月19日―1930（昭和５）年９月25日

金沢の塾で儒学を学ぶ

砺波郡鷹栖村（現砺波市）の大地主の二男として生まれました。９歳で父が、13歳で兄が亡くなったため、四郎兵衛が家を継ぎました。子どものときは寺子屋で勉強し、その後、金沢の塾で儒学の一つである陽明学*を学びました。この塾で四郎兵衛は、学んで得た知識を実際の行動に生かすことが大切だという教えを身に付けました。

生家の跡に建てられた生誕碑（砺波市鷹栖）

砺波地方を発展させたい

日ごろ「人間に上下の区別はない」と話していた四郎兵衛は、島田孝之（砺波郡般若野村）らと越中改進党の結成に参加しました。米の値段が大きく下がって困っていた農民を救おうと、税を軽くするよう政府に求めるなどの活動をしました。

28歳で県議会議員に初当選してからは、「砺波地方を発展させるためには、経済活動の拠点としての銀行をつくり、砺波平野の米を運ぶ鉄道を建設しなくてはならない」と考えるようになりました。

創建当時の中越銀行（北陸銀行提供）

県内初の中越鉄道が開通

四郎兵衛は中越銀行設立にも参加したほか、砺波平野を流れる宮川に船を通して高岡や伏木と結ぶ会社をつくり、周辺道路の建設にも取り組みました。さらに、地域がこれからも発展していくための決め手は、鉄道が通ることだと考えていました。

当時は国鉄の北陸線が大阪から福井県の敦賀まで来ていただけでした。四郎兵衛は1892（明治25）年ごろ、高岡と城端を結ぶ中越鉄道（現ＪＲ城端線）を自分たちの力で建設しようと思い立ちました。

砺波のほかにも高岡、射水の有力者の協力が得られ、1895（明治28）年、四郎兵衛が社長になって中越鉄道建設のための会社がつくられました。

工事が始まった後に庄川の洪水で線路が水に押し流される災害にあい、高岡停車場の場所を変更するなど計画の見直しを迫られることもありました。しかし、1897（明治30）年には、富山県で初めての鉄道が開通しました。

中越鉄道が開業した当時の第１号機関車（南砺市立中央図書館提供）

＊陽明学【ようめいがく】　中国の明の時代に王陽明が始めた哲学です。日本では幕末に佐久間象山、西郷隆盛、吉田松陰らが学びました。

気持ち新たに北海道で開拓

1897（明治30）年５月９日には、高岡―福野間に富山県で初めて蒸気機関車が走りました。高岡では盛大な開通式が行われ、当時「陸蒸気」と呼ばれた蒸気機関車を一目見ようと線路沿いには大勢の人が集まり、花火も打ち上げられました。その後、福野―福光間、福光―城端間、高岡―伏木間の工事が進められ、城端から氷見までの全線が開通したのは1912（大正元）年９月19日でした。

四郎兵衛は1898（明治31）年には、衆議院議員に初当選し、以来５年４か月にわたって国の政治に携わりました。

また、明治25年ごろから北海道へ移住する者が増え始め、四郎兵衛も1900（明治33）年に新天地である北海道へ渡り、４年後岩内郡小沢村で大矢農場を開きました。1917（大正６）年には、小沢村の村議会議員に選出されました。

中越鉄道の開通を伝える当時の新聞（富山県立図書館蔵）

北海道小沢村の大矢農場の跡地

夢や志をかなえたポイント！

- 人を差別しない
- 時代の変化に敏感に対応する
- やろうと思ったことは、責任をもって進める

1857（安政４） …… 0歳
砺波郡鷹栖村の大地主の家に生まれる

1884（明治17） …… 27歳
砺波活版所をつくる

1885（明治18） …… 28歳
県議会議員になる

1895（明治28） …… 38歳
県議会議長になる
中越鉄道の社長になる

1898（明治31） …… 41歳
衆議院議員になる

1900（明治33） …… 43歳
北海道に移住し開拓の仕事を進める

1908（明治41） …… 51歳
県立砺波中学校の設立が認可される

1930（昭和５） …… 72歳
北海道岩内郡小沢村で亡くなる

コラム
砺波中学校の設立に尽力し、新聞も発行した四郎兵衛

四郎兵衛はほかにも砺波のためにたくさんの仕事をしています。農民に桑の苗を無料で配り蚕を飼育する副業を勧めたり、県立砺波中学校（現県立砺波高校）の設立に尽力したりしています。

また、砺波に印刷所をつくり、1894（明治27）年には県内で初めての政党機関紙「富山日報」の社長にも就任しています。

生家近くに建てられた四郎兵衛の銅像

豆知識　砺波郡新西嶋村（現小矢部市）出身の沼田喜三郎も1882（明治15）年、北海道へ渡り、雨竜郡北竜村の土地を開墾しました。この地は開拓者の名をとって1922（大正11）年に「沼田町」と名づけられています。

富山県を「電力」で元気に
初代 金岡 又左衛門

薬種商の主人で政治家　北陸初の水力発電所を建設　富山に初めて電灯をともす

1864（文久 4）年1月 22 日―1929（昭和4）年6月 10 日

15 歳で薬種商の主人に

金岡又左衛門は、漢方薬などを扱う大きな薬種商の長男で幼名を米太郎といいました。15歳で父を亡くし、又左衛門と改名して家業を継ぎました。母は当主となった又左衛門に「誠の人として正しい道を進みなさい」と説きました。この教えを胸に又左衛門は商売に励み、金岡家はますます栄えました。

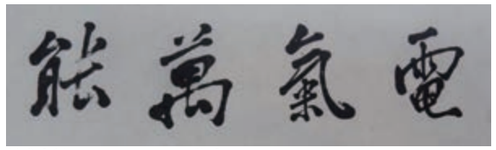
又左衛門が生まれた家。現在の富山県民会館分館金岡邸（『金岡又左衛門翁』より）

豊富な水を発電に活用したい

又左衛門は28歳で県議会議員になり、30歳で衆議院議員に当選しました。

1887（明治20）年、日本で初めての電灯が東京でともり、続いて神戸、大阪などにも広がりました。これらの電灯には火力発電による電気が使われていました。富山の密田孝吉という若者が電気に注目し、又左衛門に富山で火力による発電事業を始めようと提案しました。しかし、又左衛門は治水という点からも川の急流を利用した水力発電がよいと考えました。富山の町々に電灯をともすため、２人で水力発電に適した場所を探すことにしました。

又左衛門は規模の小さい発電から始めることにし、上新川郡塩村（現富山市）にある大久保用水に目を付けました。この用水は神通川から水を引いているので水量が豊富なうえ、何よりも富山市に近いことが魅力でした。



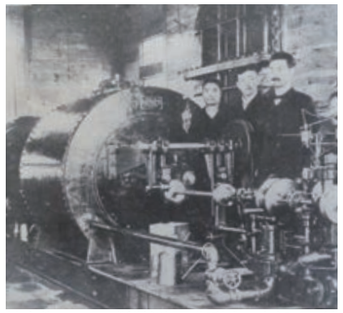
又左衛門が書いた書「電気万能」（『金岡又左衛門翁』より）

電灯から工業用へ事業拡大

当時、「電気」を理解する人は少なく、地主から用水を使わせてもらうのに大変苦労しました。その後、用水が使えることになり、又左衛門が社長、孝吉が支配人に就いて富山電灯（現北陸電力）を設立しました。

北陸で初の水力発電所大久保発電所が完成したのは1899（明治32）年３月７日でした。火力発電が主だった当時の日本では、水力発電所は最新技術を誇るものでした。４月１日には、富山市内への送電が始まり、中心部で約1000世帯に電灯がともりました。

ところが、この年の８月12日、富山の市街地の３分の２を焼く大火がありました。富山電灯本社も全焼したほか、配線のほとんどが焼け落ちました。大きな損害となりましたが、又左衛門らのがんばりによって、５年後には本社を再建しました。



大久保発電所で北陸最初の発電機を視察する又左衛門（右）（金岡邸提供）

富山県に多くの工場を呼ぶ

又左衛門は1911（明治44）年、神通川の猪谷を水源として北陸初の大型水力発電所の庵谷第一発電所を完成させ、さらに庵谷第二発電所の建設を計画しました。

庵谷第一発電所の電力を売るのに苦労していた重役たちは大反対です。しかし、又左衛門は「十分な電気を準備しておかないと、新しい工場は来ない」と押し切りました。そうして、1915（大正４）年に第二発電所の建設に着手しました。

1914（大正３）年から始まった第一次世界大戦ごろから、日本では工業化が進みました。ところが、富山県に新しい工場を建てようという動きがありません。又左衛門は氷見市出身で「セメント王」と呼ばれた浅野総一郎（→32ページ）を東京に訪ねて相談しました。すると、日本鋼管（現ＪＦＥスチール）の社長を紹介されました。交渉の結果、伏木富山港の近くに日本鋼管の新工場が建つことが決まりました。

これがきっかけで、富山県は電気が安く、工場建設に適していることが全国に知られるようになりました。

北陸地方の電源開発は、又左衛門の後継者となった山田昌作によってさらに進められ、富山県に工場があいついで進出していったのです。

庵谷第一発電所（『金岡又左衛門翁』より）

夢や志をかなえたポイント！

- 親の教えを守る
- 先を読んで早めに手を打つ
- 教育のために力を貸す

1864（文久 4）…… 0 歳
新川郡新庄の薬種商に生まれる

1879（明治 12）…… 15 歳
家業を継ぐ

1886（明治 19）…… 22 歳
若い人のために育英事業を始める

1892（明治 25）…… 28 歳
県議会議員になる

1894（明治 27）…… 30 歳
衆議院議員になる

1897（明治 30）…… 33 歳
富山電灯を設立

1909（明治 42）…… 45 歳
富山電灯の社名を富山電気とする
庵谷第一発電所を建設

1922（大正 11）…… 58 歳
常願寺川治水同盟会を結成し会長になる

1929（昭和 4）…… 65 歳
富山電気の社名を日本海電気とする
亡くなる

コラム
優れた才能をもつ青年の勉学を支援

又左衛門は 22 歳のときから、貧しい家の青年たちが大学に進んで勉強できるようにと、お金を送っていました。

このことを又左衛門は死ぬまで秘密にしていて、葬儀で一部が明らかになった程度です。

又左衛門から奨学金を受け取っていた人は、学者や政界、財界で活躍した人など 100 人を下りません。

晩年の又左衛門（『金岡又左衛門翁』より）

豆知識　富山市で初めてともった電灯は、密田孝吉が東京から技術を持ち込んだアーク灯でした。当時はまだ電球がなく、電極間の放電の火花を光源とするアーク灯が照明に利用されました。

剱岳と黒部の魅力を紹介しよう

宇治 長次郎

優秀な山のガイド　陸地測量部の案内人　剱岳・黒部峡谷案内の達人

1871（明治4）年12月23日―1945（昭和20）10月30日

山仕事で鍛えられた子ども

常願寺川が流れる新川郡下山和田村（現富山市）で生まれ、14歳のときに隣の小見村の宇治家に養子に入りました。

長次郎は子どものときから山の木を切ったり、砂防工事の現場で働いたりしました。岩から岩へ飛び移る技は村では一番だったうえ、百貫（375kg）の荷物を軽々と背負って歩きました。

長次郎の銅像（富山市粟巣野）（富山市大山歴史民俗資料館提供）

剱岳（国土交通省国土地理院北陸地方測量部提供）

安心して登山できるルートを案内

長次郎は、山道を登るのが得意だったうえ、雲の動きや形、風の向きなどを見て天候を予測することができました。また、面倒見がよく、たくさんの友人がいました。そうした特技や才能を生かし、山のガイドの仕事もしていました。

長次郎は岩場や険しい山でも、軽々と登ることができました。また、危険な場所を無理に進むことはなく、人々が安心して登ることができるルートを案内しました。長次郎の山登りの技術の高さや知識の深さは、登山家も驚くほどでした。

そんな長次郎は1907（明治40）年7月、陸軍の陸地測量部から剱岳頂上までのガイドを頼まれました。地図を作るために剱岳の頂上に三角点*を打ち込む仕事です。当時、剱岳はだれも登ったことのない神聖な山と考えられていました。

剱岳登頂を成功させる

長次郎は測量部とともに剱岳に挑み、重い荷物を背負って登りました。あちこち歩き回って、登りやすい場所を探しますが、頂上へのルートは見つかりません。長次郎はいろいろな場所を見て回った結果、雪渓（雪が積もった谷）を登るしかないと考えました。そして、一行は慎重に雪渓を進み、7月28日、ついに測量部は三角点を設置しました。

優秀な山のガイドとして有名になった長次郎に1909（明治42）年、再び剱岳のガイドの依頼がありました。今度は測量ではなく、日本画家の石崎光瑤をはじめとする日本山岳会という一般の人たちの登山です。一行は長次郎の案内のもと測量部と同じルートをたどり、民間人として初めて剱岳頂上に立ちました。この登頂がきっかけとなり、スポーツとしての登山が一般の人にも広がっていきました。

石崎光瑤が撮影した「剱岳登頂記念写真」（安曇野市豊科近代美術館蔵）

＊三角点【さんかくてん】　三角測量の基準となる点。以前は三角測量で測量し、縮尺して地図を作っていました。

剱岳と黒部峡谷の名ガイド

1909（明治42）年、日本山岳会のメンバーは長次郎の見事な案内ぶりをたたえて、登頂ルートである剱岳東面の三ノ沢雪渓を「長次郎谷」と名づけました。また、このときのメンバーの一人吉田孫四郎が書いた紀行文によって、「剱岳の名ガイド」として長次郎の名は多くの人に知られるようになりました。

1915（大正4）年、長次郎の実力と人柄の評判を聞いた有名な登山家からガイドを頼まれました。この登山家は富山市出身で英文学者でもある田部重治と日本山岳会会長を務めた小暮理太郎（群馬県出身）です。長次郎たちは、剱岳や黒部峡谷の難しい登山ルートを見つけました。

また、秘境といわれる黒部の谷や山を探検し、その魅力を紹介して「黒部の父」といわれた登山家、冠松次郎（東京都出身）から、長次郎は厚い信頼を得ていました。1919（大正8）年からのおよそ10年間、長次郎は松次郎に付き添い、黒部峡谷のほとんどすべての支流と尾根に足を踏み入れました。長次郎は「黒部の名ガイド」としても知られるようになり、70歳を過ぎても山のガイドを続けました。

長次郎谷（国土交通省国土地理院北陸地方測量部提供）

長次郎（右から2人目）と冠松次郎ら一行（㈳日本山岳会蔵、黒部市歴史民俗資料館提供）

1871（明治4） …… 0歳
新川郡下山和田村に生まれる

1885（明治18） …… 14歳
宇治弥三右衛門の養子になる

1902（明治35） …… 31歳
信濃越中方面で二等三角測量の仕事をする

1907（明治40） …… 36歳
測量三角点設置のため剱岳登頂に参加

1909（明治42） …… 38歳
日本山岳会の案内人として剱岳に登頂

1915（大正4） …… 44歳
田部重治に案内を頼まれ剱岳北方ルートを開く

1919（大正8） …… 48歳
この年から黒部峡谷のほとんどに足を踏み入れる

1936（昭和11） …… 65歳
NHK「名ガイドを囲む座談会」に出席

1945（昭和20） …… 73歳
亡くなる

夢や志をかなえたポイント！

- 家の手伝いを通して体を鍛える
- 自分の特技を生かす
- 未知のことにも挑戦する

コラム　剱岳の錫杖

陸軍の陸地測量部の一行が剱岳山頂に着いたとき、一行は修行の僧が持つ錫杖の頭と鉄剣を発見しました。剱岳登頂の一番乗りだと思っていたのが、そうではなかったわけです。

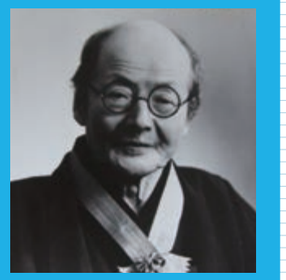
錫杖の頭は奈良時代末から平安時代の初めのものと考えられますが、はっきりした製作年代は分かっていません。この錫杖の頭は現在、国指定重要文化財として富山県〔立山博物館〕で保存されています。

豆知識　長次郎にガイドを頼んだ日本山岳会のメンバーは、石崎光瑤（南砺市出身）、吉田孫四郎（高岡市出身）のほか、河合良成（南砺市出身）、野村義重（舟橋村出身）ら東大生でした。

日本語の文法を解明したい
山田 孝雄

国文学の学者　富山県人初の文化勲章　富山市名誉市民

1875（明治8）年8月20日—1958（昭和33）年11月20日



家計を助けるために先生となる

新川郡富山町総曲輪（現富山市）で元富山藩士の二男に生まれました。

明治維新後に藩がなくなり、藩士であった父が仕事を失ったことなどから、苦しくなった家計を助けようと、入学していた富山県尋常中学校（現県立富山高校）を中退しました。その後、学校の先生になるため、一人で勉強に励みました。

日本語の文法を解明したい

小学校の先生になった孝雄は、草島尋常（現富山市立草島小学校）、上市尋常高等（現上市町立上市中央小学校）、下村忠告尋常（現射水市立下村小学校）の各小学校に勤めました。富山市の自宅からどんなに遠い学校でも朝早く起きて歩いて行きました。

学校から帰ってからも猛勉強を続け、中学校、師範学校の先生になる試験に合格し、1896（明治29）年、兵庫県の私立鳳鳴義塾（現篠山鳳鳴高校）の先生になりました。

ある日、生徒から「教科書に『は』は主語を表す助詞とありますが、『は』は『日本では富士山が高い』というときの『は』のように、主語でない場合にも使われるのではありませんか」と質問され、答えられなかったことがありました。孝雄は自分の不勉強を恥じ、国語の文法教育はもっとしっかりしないといけないと考えるようになりました。

「日本文法論」が完成

その後、孝雄は奈良県尋常中学校（現郡山高校）の五条分校（五條市）で教師と舎監（寄宿舎を管理、監督する先生）を兼ねた仕事に就き、昼も夜も働き続けました。孝雄の「もっと家に送金を」という思いからでした。

孝雄が学校にいなかったときに、分校が火事で焼ける事件が起きました。孝雄は責任を感じて転勤を申し出ました。そして高知県立第一中学校の安芸分校（現安芸高校）に移り、仕事に打ち込み、日本語の文法を熱心に研究しました。

孝雄が高知にいたときに研究をまとめた論文が、後に孝雄の代表作となる「日本文法論」です。1902（明治35）年に完成したこの研究は、それまでの日本語の文法を基に手を加え、さらに外国語の文法理論を取り入れたもので、「山田文法」の名で広く知られています。

著書『日本文法論・上』と原稿（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）

実を結んだ長年の努力

孝雄はこの論文を『日本文法論・上』と題して出版し、その後、博士号をもらう論文として東京帝国大学（現東京大学）文学部に送りました。しかし、学歴のない孝雄の論文は文学部の教授らに読まれることなく月日が過ぎていきます。1908（明治41）年には1500ページにおよぶ大作『日本文法論・全』も出版しました。

その後、孝雄は日本大学講師や東北帝国大学（現東北大学）の教授を務め、国文法以外に万葉集や俳句などの研究も行い、国文学の世界で孝雄はどんどん有名になっていきました。

そんなとき、東京帝国大学から再度、論文を出すように求められました。そして最初に論文を出してから25年後の1929（昭和4）年、54歳になっていた孝雄に文学博士の学位が与えられました。

1957（昭和32）年には、国語学界の第一人者として、富山県人では初の文化勲章を受けました。生涯におよそ300点の論文と70点余りの専門書を著しています。

家族との記念撮影（後列左から4人目が孝雄）（個人所有）

文学博士学位授与の祝賀会（個人所有）

山田孝雄文庫（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）

1875（明治8） …… 0歳
富山町総曲輪に生まれる

1887（明治20） …… 12歳
富山県尋常中学校に入学

1892（明治25） …… 17歳
草島尋常小学校の先生になる

1896（明治29） …… 21歳
兵庫県の私立鳳鳴義塾の先生になる

1902（明治35） …… 27歳
『日本文法論・上』を刊行

1908（明治41） …… 33歳
『日本文法論・全』を刊行

1920（大正9） …… 45歳
日本大学の講師になる

1927（昭和2） …… 52歳
東北大学教授になる

1929（昭和4） …… 54歳
文学博士となる

1944（昭和19） …… 69歳
貴族院議員になる

1953（昭和28） …… 78歳
文化功労者に選ばれる

1957（昭和32） …… 82歳
文化勲章を受章

1958（昭和33） …… 83歳
仙台で亡くなる

夢や志をかなえたポイント！

- たくさん本を読む
- 分からないことはとことん調べる
- 結果がすぐに現れなくても、努力を続ける

コラム　一生に3万冊を読んだ大学者の蔵書の一部「山田孝雄文庫」

孝雄は文化勲章を受けると同時に富山市名誉市民に選ばれました。富山市は1996（平成8）年に遺族から寄贈された孝雄の蔵書を整理し、富山市立図書館の専用の部屋で「山田孝雄文庫」を開設しています。孝雄は生涯に3万冊の本を読んだといわれますが、文庫にはおよそ1万8000点が収められています。

山田孝雄が著した本の一部（富山市立図書館山田孝雄文庫蔵）

豆知識　小学校の先生をしていたころ、孝雄は毎日同じ時間に家を出て歩いて行きました。近所の人が時計代わりにするほど、時間は正確でした。

横綱になって故郷に恩返しを
太刀山 峰右衛門

大相撲の第 22 代横綱　56 連勝の大記録　呉羽小学校に相撲場を寄付

1877（明治 10）年8月 15 日―1941（昭和 16）年4月3日

村で評判の力持ちの大男

太刀山は本名を老本弥次郎といいます。婦負郡吉作村（現富山市）で農業と製茶業を営む家の二男に生まれました。

小さいときから大きな体格で力も強かったので、茶葉を手でもむ仕事の手伝いをさせると良いお茶ができたといわれています。18歳のときに兄が病死したため、家の跡を継ぎました。

太刀山の誕生地の碑(富山市吉作)

太刀山が入門したときの写真（『太刀山』より）

板垣退助の説得で入門を決意

弥次郎は20歳のときの身長は184.2cm、体重は78.9kgありました。1898（明治31）年、大相撲の地方巡業が富山で行われたとき、弥次郎のうわさを耳にした友綱親方から入門を勧められましたが、弥次郎は家の跡継ぎだったため断りました。

親方はあきらめきれず、東京へ帰ってから部屋の後援者であった板垣退助に協力を求めました。板垣は富山県知事に働きかけ、今度は知事から父が説得されました。父親は入門を認めることにしましたが、弥次郎はまだ気乗りがしませんでした。

次に弥次郎は「東京見物にこないか」と親方から誘われました。弥次郎が上京すると、親方と板垣退助が二人がかりで弥次郎を説得しました。弥次郎はようやく入門を決意しました。

めきめきと力をつけて初優勝

しこ名は板垣退助が故郷の立山にちなんで「太刀山峰右衛門」と命名しました。「太刀山」は立山の古い呼び方です。太刀山はけいこに励み、「突っ張り」と「吊り」を得意とする力士に育っていきました。

太刀山は1900（明治33）年５月場所に幕下で初土俵を踏みました。けいこに励んでめきめき力をつけ、負け越しなしでスピード出世し、1905（明治38）年５月場所で関脇に昇進しました。

太刀山は、一突き半で相手を土俵の外に跳ね飛ばすことから「四十五日」（一月半）と呼ばれた「突っ張り」のほか、大きな身体で繰り出す「仏壇返し*」を得意技にし、向かうところ敵なしの強さでした。

大関になった1909（明治42）年６月場所と翌年１月場所に連続して準優勝したあと、次の年の６月場所に初優勝しました。

新聞社から贈られた記念の銀杯
（富山市立呉羽小学校蔵）

＊仏壇返し【ぶつだんがえし】 正式名称は「呼び戻し」。両力士が互いに四つに組み、互いにまわしをつかんだ状態から、上手投げのように片方の手で相手のまわしを引き、相手力士が踏ん張ったところで今度は逆の手を激しく突き返す技です。

無敵の大横綱として活躍

次の場所も優勝し、太刀山は連続優勝を果たしました。このとき、太刀山は第22代横綱に推され、正横綱となりました。

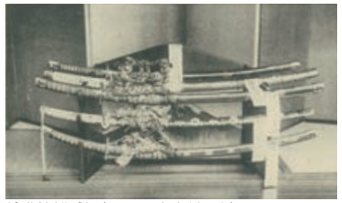
この時期は大相撲で越中出身力士が活躍した時代でした。1912（明治45）年１月場所の番付を見ると、横綱に太刀山、梅ヶ谷、小結に玉椿、前頭に緑島、黒瀬川、寒玉子という力士が名を連ねています。

太刀山は1918（大正７）年1月場所を最後に引退するまで、優勝が大関で２回、横綱で７回、合わせて９回ありました。この間43連勝のあと１敗して連勝が途切れたものの、次の日からまた56連勝するという記録を残しています。幕内の通算の成績は195勝27敗で勝率はおよそ88％でした。横綱になってからの14場所では84勝して３敗しかせず、96．５％の勝率を誇りました。

太刀山は1917（大正６）年１月場所（当時は10日間）で９勝１敗の好成績でしたが、優勝を逃し、このころから力の限界を感じ始めます。そして次の年の１月場所の後に引退しました。40歳になっていました。

1940（昭和15）年、太刀山が故郷の西呉羽村へ寄付したお金で呉羽小学校に「相撲殿」が建設され、現在も使われています。呉羽地区では、今でも相撲や柔道が盛んです。

1910（明治 43）年６月の大角力勝負星取表（部分）（富山市郷土博物館蔵）



前田利為侯爵らから太刀山に贈られた刀（『太刀山』より）

太刀山の横綱土俵入り（『太刀山』より）

夢や志をかなえたポイント！

- やると決めたことは、精一杯努力する
- だれにも負けない特技をもつ
- 故郷に感謝の気持ちをもつ

1877（明治 10）……0 歳
婦負郡吉作村の老本家に生まれる

1899（明治 32）……22 歳
相撲界に入り太刀山峰右衛門と名乗る

1900（明治 33）……23 歳
幕下になり全勝優勝する

1905（明治 38）……28 歳
関脇になる

1907（明治 40）……30 歳
けいこをつけてくれた横綱常陸山に初めて勝つ

1909（明治 42）……32 歳
大関になる

1911（明治 44）……34 歳
22 代目の横綱になる

1916（大正 5）……39 歳
９回目の優勝をする

1918（大正 7）……40 歳
相撲界を引退する

1941（昭和 16）……63 歳
東京大久保の自宅で脳出血のため亡くなる

コラム　元気に還暦相撲を披露した太刀山

太刀山は胃腸に病気をもっていたので、治療のために休場することも多い力士でした。このため、当時の力士には珍しく食事などに気を使っていました。

太刀山は 1937（昭和 12）年、上野のレストラン・精養軒で赤い綱を締めて、大相撲史上初めての還暦*土俵入りを行いました。健康を心がけていたからこそ、元気に還暦を迎えることができたのです。

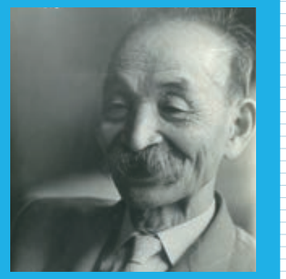
太刀山の姿を写した版画
（富山市郷土博物館蔵）

＊還暦【かんれき】 数え年で 61 歳をいう語です。

音楽の素晴らしさを若い人に
福井 直秋

初めての和声学の教科書を執筆　武蔵野音楽大学の創設者　一生で約 1000 曲を作曲

1877（明治 10）年 10 月 17 日―1963（昭和 38）年 12 月 12 日



歌が上手なお寺の息子

北陸地方の多くのお寺では、お経を読むときに、仏教の教えを分かりやすい言葉で歌にした「和讃」も歌われていました。

新川郡江上村（現上市町）のお寺の五男として生まれた福井直秋は、幼いころから毎日この歌を聞いて育ち、澄み切った声で上手に歌うようになりました。

直秋が生まれた家

音楽の道を志すことを決意

入学した東江上小学校（現上市町立宮川小学校）には、当時大変珍しいオルガンがありました。音楽好きな先生がオルガンを弾きながら、西洋から入ってきたばかりの曲を歌ってくれました。直秋はその美しさに感動し、音楽へのあこがれを抱きました。

小学校を卒業した後は、学校の先生になるために富山県尋常師範学校（現富山大学）へ進みました。

ここで直秋は、東京音楽学校（現東京芸術大学）を卒業した安田俊高先生に出会いました。直秋は先生の音楽に対する教養の深さと情熱にすっかり心を奪われ、音楽の道に進みたいと考えるようになりました。

しかし、周りの人たちからは「師範学校まで出た人間が、音楽のような遊びをなぜするのか」と、反対されました。でも直秋の固い決心は変わりませんでした。

音楽の教育家として高い評価

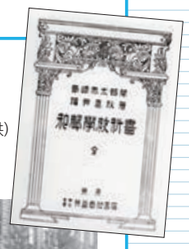
1899（明治32）年、直秋はあこがれの東京音楽学校へ入学しました。

直秋と同じ東京音楽学校で学んだ県出身の音楽家には、「夕日」などの童謡を作曲した室崎琴月（1891～1977）（高岡市出身）と、バイオリニストの高階哲夫（1896～1945、滑川市出身）がいます。

音楽学校で学ぶうち、直秋は演奏家よりも音楽の教育家になろうと考えるようになりました。

東京音楽学校を優秀な成績で卒業した直秋は、音楽教師として富山や長野の師範学校に勤めました。富山県師範学校時代には、自分が作曲した曲を授業に使う新しい手法で注目されました。長野県師範学校（現信州大学）では教本を書き始め、『日英唱歌集』『初等和声学』の2冊を発表しました。

『初等和声学』は、日本人が書いた初めての和声学*の教科書として、高い評価を受けました。



直秋が書いた『和声学教科書』（武蔵野音楽大学提供）

東京音楽学校時代の卒業記念写真。前列右端が直秋（武蔵野音楽大学提供）

＊和声学【わせいがく】　音楽を構成する和音と、パート進行の関係を学ぶ学問。和声はメロディー（旋律）、リズム（律動）とともに音楽の三要素の一つとされます。

武蔵野に新しい音楽大学を創立

その後、1928（昭和 3）年、東京の私立音楽学校の初代校長に招かれました。しかし、学校は 8 か月で閉校してしまい、学びの場を失った生徒たちは直秋を慕い、新しい学校の開設を求めました。

直秋は悩みましたが、生徒たちの音楽への情熱に押され、東京の武蔵野で新しい音楽学校の創設を決意します。友人、知人、親戚縁者に頼んで資金を出してもらい、1929（昭和 4）年 1 月、廃校寸前だった私立学校の校舎を借りて授業をスタートさせました。教員34人、生徒は121人でした。前の学校で行き場をなくした生徒のほとんどが入学しました。

この武蔵野音楽学校は、1932（昭和 7）年の専門学校令で各種学校から専門学校に昇格し、日本で最初の私立音楽専門学校になりました。

そして戦後の1949（昭和24）年、学制改革によって新制音楽大学に認められました。今では、日本を代表する音楽大学の一つとして知られ、優れた音楽家をたくさん世に送り出しています。

直秋は亡くなる前年の85歳まで武蔵野音楽大学の学長を務め、生涯に約1000曲を作曲しました。

創立間もなくの武蔵野音楽学校（武蔵野音楽大学提供）

ピアノを弾く直秋（武蔵野音楽大学提供）

武蔵野音楽大学で講義をする直秋（武蔵野音楽大学提供）

1877（明治 10） …… 0 歳
新川郡江上村に生まれる

1895（明治 28） …… 18 歳
富山県尋常師範学校に入学

1899（明治 32） …… 22 歳
東京音楽学校に入学

1902（明治 35） …… 25 歳
富山県師範学校の教師になる

1904（明治 37） …… 27 歳
長野県師範学校の教師になる

1908（明治 41） …… 31 歳
『初等和声学』を刊行

1920（大正 9） …… 43 歳
東京青山師範学校の教師になる

1929（昭和 4） …… 52 歳
武蔵野音楽学校を開設し校長になる

1949（昭和 24） …… 72 歳
武蔵野音楽大学の初代学長になる

1962（昭和 37） …… 85 歳
上市町の名誉町民に選ばれる

1963（昭和 38） …… 86 歳
東京都の自宅で亡くなる

夢や志をかなえたポイント！

- 先生との出会いを大切にする
- 自分が得意なことをもっと深める
- 一生続けられることを見つける

コラム　直秋が影響を受けた作曲家 滝廉太郎

「荒城の月」などの作曲家として知られる滝廉太郎は、小学生のころの数年を富山県で過ごしました。後に東京音楽学校を卒業し、同校の教授補助をしているとき、学生の福井直秋と親しくなりました。

二人は富山の思い出などを語り合いながら交流を深め、廉太郎がヨーロッパへ留学する送別音楽会では直秋が学生を代表して送別の言葉を述べました。

滝廉太郎少年像（富山市丸の内）